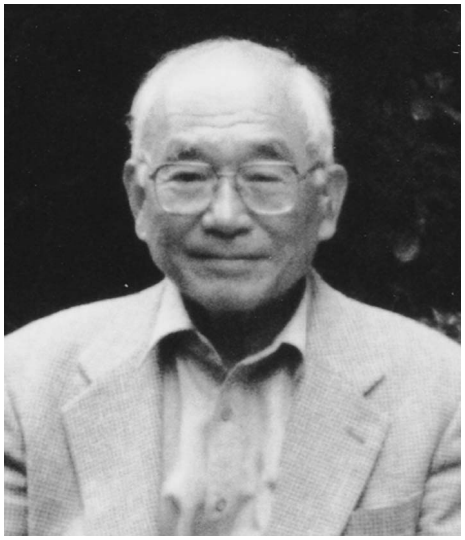
荒木　峻先生をしのぶ



1915 年熊本県に生まれる。**1941** 年 **12** 月東京帝国大学工学部応用化学科を卒業。**1942** 年 **2** 月応召。**1945** 年 **1** 月東京大学工学部講師兼任。その後同大学助教授，教授を歴任。**1959**～**79** 年東京都立大学教授。**1962**～**63** 年米国ペンシルベニア州立大学，**1977**～**79** 年東京都立大学工学部長，**1979** 年東京都立大学名誉教授。**1979**～**81** 年横浜国立大学教授。**1986**～**96** 年㈶化学品検査協会理事長。この間日本分析化学会理事，同関東支部長，同「分析化学」編集委員長，同「ぶんせき」編集委員長，**1977** 年同会長。**1968** 年「機器によるガス分析法の研究」で日本分析化学会学会賞受賞。**1978** 年日本分析化学会名誉会員。**1979** 年藍綬褒章，**1988** 年勲三等旭日中綬賞受賞。**2012** 年 **3** 月 **29** 日逝去。

荒木　峻先生は去る 3 月 29 日腎盂炎のために，不帰の客になられた。享年 96 歳であった。ここに生前のご功績を偲び，謹んで哀悼の意を表します。

荒木先生は東京帝国大学工学部応用化学科で宗宮尚行先生に師事された。鉄鋼中の水素の分析に関連して，卒業研究では“金属表面の水の定量”という課題のもと，特に真空中での水の抽出法を工夫されたとのお話を伺っている。真空技術を身につけられたことは，後の質量分析法の研究の切っ掛けとなったとのこと。真空系を作るのに必須であるガラス細工の腕も磨かれて，1950 年頃に分解能 40 ぐらいの測定ができる質量分析計を自作され，天然ガス等，ガス分析に活用された。1953 年に総合試験所に CEC の質量分析計が納入されて以後は中心になって日本全国からの研修や，依頼分析にも応えられたとのこと。この頃のお話は，本誌 1984 年 6 月号“分析化学のあゆみ”に詳しい。

1959 年 3 月に東京都立大学工学部工業化学科の教授として赴任され，新設の工業分析化学講座を担当された。少ない予算のもと，最初の頃はせっせと記録計の数を増すことに力を入れられた。その他は手作りのものも多く，”価値あるデーターは自作の装置で出せ”と言われたものである。学生実験で使うガスクロマトグラフが研究室で作ったガラス製のものであったこともある。

先生は日本分析化学会の誕生に立ち会われており，本部，支部の発展にずっと貢献されてきた。また，ガスクロマトグラフィー研究懇談会生みの親の一人でもある。都立大に赴任された頃は，先生の研究の中心が質量分析からしだいにガスクロマトグラフィー（GC）に移りつつあったようである。そこで 1963 年に大学院が開設された前後から，GC の適用範囲の拡大を目的とした研究テーマも多かった。例えば，熱分解や光分解と組み合わせた GC，連続向流 GC，化学発光検出器の開発等々である。

GC は環境，特に大気汚染の問題解決にも広く利用されてきた。環状 7 号線の大原交差点付近，東京タワーの展望台や階段付近の大気，工場地帯の大気等，多くの汚染調査も手がけておられ，これら試料を対象とした新しい分析手法の開発にも貢献されている。

これらのこともあってか，先生は JIS の原案作成委員会をはじめ，通産省（現経産省），環境庁（現環境省）など各種委員会でも無くてはならない存在として，忙しい日々を過しておられた。そんな中，大学に居られて，昼食の時間になると職員，学生を誘って食堂に行く習慣を作られ，まとまりのある集団とされていた。都立大では B コースと言って夜間を主とする学生がいて，5 時限と 6 時限の授業があった。上記のような雰囲気での研究，教育態勢のもと，夜の講義を終えて居室に戻られる先生を研究室の学生共が，お疲れでしょうと，お好きなお酒を出して頂こうと待ち構える風景もしばしば見られた。こんな時，先生はよほどのことがない限り，気さくに応じ，しばし歓談の時を共にし，時には自由が丘，渋谷へと繰り出すこともあった。

先生は「質量分析法」，「ガスクロマトグラフィー」（東京化学同人）をはじめとして多くの著作を残された。どれも無駄のない，価値ある内容ばかりが盛り込まれており，仕事への信念と情熱を感じさせるものである。後年，出版時に，誤植等を見つけたらご褒美を頂けるというので，熱を入れてこれを読むということで，学生の勉強をうながす作戦を採られたこともなつかしい思い出である。

先生は山登りと 8 ミリ撮影を趣味とされていた。毎年，梅雨明けには研究室旅行で山に登ることを年中行事の一つとしていた。お供に 8 ミリ撮影機を携えて，ときには健脚をかって先回り撮影もされていた。帰るとタイトルなどを入れた編集もされた。そこで，我々学生は正月がくるのを楽しみにしていた。お宅へ伺って 8 ミリを見せて頂き，ご馳走にもなるという，これも年中行事の一つであった。研究の中間発表会での厳しい指導とのシナジー効果もあったろう。

荒木研究室の卒業生もよく集まる。先生が都鳥の「鴎」と分析の「分」から「鴎分会」と名付けた会を開いてきた。つぎは中心の先生のいない寂しい会を開かねばならない。過日，「そうかい，わっはっはっは」と言う声が聞こえてくるような写真が飾られた祭壇でお別れをした。

心から先生のご冥福をお祈り致します。

〔東京都立大学名誉教授　保母敏行〕